

SHOW-HHEYシネマルーム

★★★★★

シカゴ

共同配給/ギャガ・ヒューマックス

2003 (平成15) 年2月13日鑑賞
＜試写会＞



監督・振付: ロブ・マーシャル
製作: マーティン・リチャーズ
舞台版台本: ボブ・フォッシー、フ
レッド・エップ
出演: レニー・ゼルウィガー/キャ
サリン・ゼタ=ジョーンズ/
リチャード・ギア

👁️👁️ みどころ

ミュージカルの神様・ホブ・フォッシーがつくり、1975年に初演されたブロードウェイ・ミュージカルを映画化したもの。アカデミー賞最多12部門13賞にノミネートされて、今、人気沸騰の作品だ。1920年代の退廃的な街シカゴを舞台に、スターを夢見る歌姫ロキシー・ハートは凄腕弁護士を味方にして、殺人事件さえも「シカゴ史上最もキュートな殺人犯」と見事にアレンジし、一躍マスコミの寵児となった。そして彼女の裁判の行方は……。果たして有罪か無罪か……。セクシーに歌い踊る多くのジャズ・ナンバーは素晴らしいし、新しいミュージカル映画の試みも面白い。とにかく、何ともアメリカ的な映画だ。

＜ミュージカル映画の楽しさ＞

私はミュージカル映画が大好きだ。昔の『ウエスト・サイド物語』から始まり、『オクラホマ』『王様と私』『南太平洋』『マイ・フェア・レディ』『サウンド・オブ・ミュージック』そして『メリーポピンズ』などすべてが大好き。またカトリーヌ・ドヌーブが主演した一風変わった昔のフランスのミュージカル『シェルブールの雨傘』もよかった。

何でも2002年という年は1902年6月に生まれたリチャード・ロジャースの生誕100周年記念にあたる年ということで、2002年11月30日NHKホールでは「魅惑のブロードウェイ・ミュージカル」が開催された。これは古谷一行がリチャード・ロジャースに扮し、オスカー・ハマー・スタインⅡ世との名コンビで作った多くのミュージカル作品を、大地真央や一路真輝らが歌い踊った楽しい番組で、年末年始にBS2で放送さ

れた。

また私は日本の劇団四季のミュージカルも大好き。『キャッツ』『ライオン・キング』『レ・ミゼラブル』をはじめ、『李香蘭』『異国の丘』、などそのほとんどの作品を観て大感激している。

<ブロードウェイ・ミュージカル『シカゴ』と本作品のミュージカル映画『シカゴ』>

この映画は、「ミュージカルの神様」といわれたボブ・フォッシーがつくり、1975年に初演されたブロードウェイ・ミュージカル『シカゴ』を映画化したものだ。2002年12月全米77館で上映されるや大人気となり、先日の第75回アカデミー賞では最多12部門13の賞にノミネートされた、今大人気の映画だ。4月19日の上映に先立ってこの映画を試写会で観ることができたのはラッキーだった。

舞台は1920年代のシカゴ。禁酒法の時代、ギャングの時代、不況の時代（世界大恐慌の前夜）の暗いアメリカ・・・のはずだが、1920年代のシカゴでは、酒、舞台、セックス、スキャンダル等が逆に悪の魅力となり、退廃的で刺激的な人間ドラマのネタとなっていた。

<主役は2人の歌姫（ダンサー）>

主役は現スターの歌姫（ダンサー）のヴェルマ・ケリー（キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ、最優秀助演女優賞にノミネート）と今後のスターを夢見る歌姫（ダンサー）ロキシー・ハート（レニー・ゼルウィガー、最優秀主演女優賞にノミネート）の2人。冒頭一方の主人公ヴェルマが「And All That Jazz」という曲を、何ともセクシーかつダイナミックに歌い踊る。まさに1920年代の退廃的な街シカゴを象徴するジャズ・ナンバーで実にカッコいい。そしてそのウラでは、しがない亭主持ちの売れないダンサーのロキシーは、夫の目を盗んで、「ショーに売り込んでやる」と誘われた愛人とベッドにしけこみ、激しいセックスを楽しんでいた。

<ロキシーの不倫殺人事件>

しかし、コトが終わると、この愛人は「売り込んでやるなんてウソさ。知り合いのプロデューサーなんかいないよ。もう俺につきまとうな」ときた。ここからは万国共通の「私を騙したのね!」という女の常套文句によるケンカ。そしてその挙句、ロキシーは、下着入れの引き出しにしまっていたピストルを取り出し、何とこの愛人を撃ち殺してしまった。

そこへ帰ってきたのは真面目な亭主のエイモス・ハート（ジョン・C・ライリー）。「家から侵入してきた男に妻が襲われそうになっていたの、妻の身を守るため私がピストル

で撃った」と浮気妻から頼まれて一芝居うったものの、警察もそれほどバカじゃない。尋問の結果、不倫妻ロキシীরウソはことごとくバレてしまった。そしてロキシীর留置所へ。

＜びっくり仰天！留置場でのステージ＞

ここらまでは割合と「真面目」なストーリー展開で、一体どんなミュージカルになるのかなと思いつつ観ていたが・・・。

絞首刑にしてやると言われ、不安気な顔で留置場に入ったロキシীর。すると留置場には何とヴェルマもいた。ヴェルマは、自分の目を盗んで不倫をしていた夫を殺した罪で留置場に入っていたのだ。さらにその他にもそれぞれいづく因縁のある女達が数名留置場の中にいた。さらに留置場には、金で何でも便宜を図ってくれる女看守長のママ・モートン（クイーン・ラティファ）の存在が大きかった。

そして何とここで、彼女ら殺人被疑者たちによる留置場でのステージが展開される。肉感たっぷりのママが歌う、「When You're Good To Mama」、そして留置場のヴェルマを含む数名の女たちが集団で歌い踊る、「Cell Block Tango」。

ここらあたりになると、大体このミュージカル映画の「つくり方」が見えてきた。これは、いろいろと難しいことを言わず、音楽とダンスを楽しまなくっちゃ・・・と思ってしまった。

＜凄腕弁護士が登場＞

しかし、やはり実はこの映画には「大真面目な」ストーリーもあった。ロキシীরママを通じて当時の凄腕弁護士ビリー・フリン（リチャード・ギア）を紹介され、これに事件を依頼した。刑事裁判もショービジネスと割り切り、陪審員説得のためなら何でもありで連戦連勝の凄腕弁護士ビリーは、まずロキシীর生い立ちについて、シカゴ市民のお涙ちょうだいのストーリーをねつ造した。マスコミはこれにまんまと乗せられ、「シカゴ史上最もキュー特な殺人犯」としてロキシীর顔が新聞紙上を踊ることになった。その結果、ロキシীর同じ髪型の女達が街中に溢れ、シカゴはロキシীরブームに湧いた。そして何とママまでが同じ髪型に化けてしまったのだ。

ロキシীরは、殺人事件を契機として、留置場にいながら、今やシカゴでスター中のスターとなったのだ。

＜ロキシীর裁判は・・・有罪か無罪か＞

ロキシীরは、弁護士ビリーの関心を惹きつけるため、自分が妊娠しているとデッチあげ

た。真面目な夫はウソの妊娠にもかかわらず、自分の子供だと信じて有頂天。夫と真面目にやり直したいと法廷で一芝居うったロキシーに感激し、夫のエイモスは証言が終わるとロキシーと抱き合う仕末。

また、法廷でロキシーを弾劾するため、「検察側の証人」として出廷したヴェルマは、ロキシーの獄中の日記帳を持ち出したが、逆に弁護士ビリーはこれを徹底的に反撃した。そして陪審員達は、チラッと見せるロキシーの太股にクラクラ、という有り様だ。

以上、マンガみたいだが、結構真面目なロキシーの殺人事件をめぐる法廷ドラマが、一方ではストーリーとして、他方ではミュージカルとして同時展開されていく。果たしてその結末は・・・。

＜ミュージカル映画の新手法は・・・＞

真面目なストーリー展開の画面とミュージカルの画面が同時平行していく手法は、多少違和感はあるものの少し馴れれば面白い。普通のミュージカル映画でも、それまで普通にしゃべっていた人物が突然歌い踊り出すわけだから、これも本来不自然なはず。２０００年に観て泣いてしまった『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（ビョーク主演）だって、すごく不自然だったが、「そういうもの」だとしてみんなが観ているわけだから、それでいいだろう。

＜いかにもアメリカ映画＞

１９２０年代のシカゴという舞台がアメリカそのものだし、ショービジネス、ジャズ、名声、マスコミというテーマもアメリカ的。そしてその上、殺人事件、陪審員、凄腕弁護士というストーリー展開もアメリカのシステムを大前提とするものだ。従って、この映画はすべてが良くも悪くもアメリカ的なものに仕上がっている。

アメリカもしくは国連軍によるイラク攻撃を間近に控えている今、イスラム社会からみれば、このようなアメリカ的なものはきっと否定されるだろうナ、と思わず関係の無いことを別の角度から考えてしまった・・・。

＜アカデミー賞の行方は？＞

第１に、同じミュージカル映画でも私は２００２年（第７４回）のアカデミー賞候補であったニコール・キッドマン主演の『ムーラン・ルージュ』の方が全体としては好きだ。もっとも音楽そのものは『シカゴ』の方がわかりやすいので好きだが・・・。なぜなら、『ムーラン・ルージュ』は男女の愛をテーマにした単純なストーリーで、わかりやすく美しいのに対し、『シカゴ』の、不倫殺人を犯しながら、凄腕弁護士のゲーム感覚による活躍により陪審員がコロリと騙された挙句、無罪となっていくというストーリー展開にはやはり抵抗感があるからだ。また、何とんでも『シカゴ』の主演女優レニー・ゼルヴィガーより

も、『ムーラン・ルージュ』の主演女優ニコール・キッドマンの方が絶対にいいから・・・。

第2に、今回のアカデミー作品賞を争っているのは、『戦場のピアニスト』他いくつかの作品だが、やはり『戦場のピアニスト』のような本格的で、涙を誘い、感動を与えてくれる映画の方が私は好きだ。しかし、とにかく楽しさいっぱいの『シカゴ』と、悲しくて美しい『戦場のピアニスト』は、いかにも両極端のアカデミー作品賞候補で面白い。

『シカゴ』は、撮影賞や音楽賞、効果賞など数部門の賞は獲ってもいいが、私は作品賞については『戦場のピアニスト』が獲って欲しいと思っている。もっともこれは私だけの趣味かもしれないが・・・。

なお私は決してこの『シカゴ』というミュージカル映画が嫌いというわけではなく、十分に楽しめる作品であることは間違いないので、念のため。

2003（平成15）年2月14日記